

全校研究「地域を発見探究」グループまとめ

I 1年次の取組

地域人材と児童生徒が直接的な関わりを通して地域について学ぶことを条件とし、小学部、中学部、高等部で一事例ずつ実践を行った。その実践を通してみられた、児童生徒が学び探究する姿と学習成果を分析することで、地域人材を活用した学習活動についての実践デザインの指針の示唆を得ることを目的に取り組んだ。

II 1年次の実践

1 実践概要 ※詳細は「実践まとめシート（1年次）」参照

小学部

実践	生活単元学習「あきさがし」における地域資源を活用した授業の学習効果について
学 習 活 動 の概要	対象：小学部第1学年児童3名、第2学年児童3名 10月12日：地域の人材資源を活用した学習 ・学校の中庭散策、学校周辺の地域の人々に質問 10月17日：地域の人材資源及び自然資源を活用した学習 (講師：こどもの森ビジターセンター職員) ・こどもの森ビジターセンター内の散策、質問
分析方法	・児童のワークシートの分析 ・児童の発言のテキストマイニング
結果	・豊富な自然資源における直接体験活動の中で生まれる自然発生的な疑問に対して、外部講師の方に専門的な知識や視点をすぐに返答してもらったことが新たな気づきにつながった。

中学部

実践	知的障害を有する中学部生徒の地域探究と学習成果～地域企業によるバスの乗り方教室～を通して
学 習 活 動 の概要	対象：中学部第1学年生徒4名 11月9日：「路線バスの利用方法とマナー」(講師 大野悠貴氏：NPO 法人 まちもびデザイン・モビリティプロモーション バスぷら博士) ・本校にて、路線バスの利用方法とマナーの学習 ・模擬バスにて路線バス内の設備についての学習 11月11日：「実車での体験と車庫見学」(講師 同上) ・バスの車両基地内にて工場見学、清掃体験
分析方法	・活動映像の分析 ・主題『ぼく(わたし)とバス』の絵画分析 ・主観量評価(長さによる置き換え、容積による置き換え)の統計分析
結果	・路線バスの描画の精緻化 ・バスに対する好意や外出意向の増加

高等部

実践	地域人材を活用した防災教育を通じた知的障害を有する高等部生徒の地域発見・探究
学 習 活 動 の概要	対象：高等部生徒 19 名 1 1 月 2 2 日：事前学習「豪雨災害について考えよう」 ・豪雨の VR 体験、状況に応じた避難行動や準備の思考、講師への質問 1 2 月 6 日：「豪雨災害について考えよう」（講師：青森県防災士会職員） ・防災士について、災害に応じた避難準備・避難行動、質疑応答、感想発表 1 2 月 1 3 日：事後学習「お礼状を書こう」 ・礼状作成
分析方法	・質問紙（リッカート法、自由記述）の統計分析、テキストマイニング
結果	・外部講師授業後の防災意識の高まり。特に、講師とやり取りをした生徒が高い傾向がみられた。 ・防災に係る地域人材の知識の拡大、避難準備、行動等具体的な内容の増加、地域資源への気付き、関心の高まりがみられた。

2 考察

小学部は地域の自然を前にし、専門家とともに学習することができたことで、秋の自然に関わる知識が増加した。中学部は専門家とともに模擬バスで路線バスの細部を観察したり、本物の路線バスに乗車し実際に清掃し、多様なバスの種類を見学したことで、路線バスの運転手の仕事の大変さに気付いたり、路線バスを利用したいという気持ちの向上が見られたりした。高等部では、専門家の講義を通して、災害場面を想定した避難行動を考えることで、災害時に自分がとるべき行動を自分ごととして考えることができるようになった。以上のことから、地域人材を活用した学習活動は、本物の教材を目の前にして専門家とともに試行錯誤できることが多くの学習効果を生み出した。また、生活年齢の上昇に伴い、講師の解説や動画での模擬的な体験も学習に有効に働くことが確認された。

次年度の方向性として次のようなアプローチが考えられる。まず、より効果的な学習活動を行うためのデザインについて検討し、専門家との共同作業により、自発的な学びや探究の姿勢を育てるプログラムを作成する。次に、体験的な学習活動を設定し、児童生徒が地域で学びを深める機会を増やすことである。最後に、様々な分野の地域人材を活用し、児童生徒の興味・関心に合わせた学習プログラムを作成することや、実践を通して得られたデータをもとに、地域人材を活用した学習活動の評価規準を明確にすることに取り組んでいきたい。

Ⅲ 2 年次の取組

1 年次と同様に、地域人材と児童生徒の直接的な関わりを通して地域資源を活用して学ぶことを条件とし、1 年次の実践で関わった地域人材との継続した関わり、学習形態の工夫、体験活動の設定等を行い発展を図った。小学部、高等部で一事例ずつ実践を行い、実践の中でみられた児童生徒が学びを探究する姿と学習成果の分析を通して、今後も継続して地域資源を活用した学習活動を効果的に行っていく上での実践デザインの検討につなげる取組とすることを目的とした。

Ⅳ 2年次の実践

1 実践概要 ※詳細は「実践まとめシート（2年次）」参照

小学部

実践	生活単元学習「なつさがし」における地域資源を活用した授業の学習効果について
学 習 活 動 の概要	<p>対象：小学部第1学年児童2名、第2学年児童3名</p> <p>・「なつ」についての質問、散策等</p> <p>6月16日：地域の人材資源を活用した町たんけん学習</p> <p>6月26日：地域の人材資源および自然資源を活用したこどもの森における学習（講師：こどもの森ビジターセンター職員、弥生いこいの広場職員）</p> <p>7月7日：お世話になった地域の方々をお招きした七夕会（地域の交番所長、町会長、地域の郵便局長、外部講師2名）</p>
分析方法	・児童のワークシート、発言のテキストマイニング
結果	<p>・人材資源や自然資源活用の学習により、知見の広がり、地域の人や施設に対する興味・関心の高まりが確認された。</p> <p>・地域資源から学ぶ学習形態よりも児童が主体となって地域資源と関わる学習形態の場合の方が、児童が地域の方々とより自主的に関わろうとする様子がみられた。</p> <p>・発達段階によって、どの程度、生活への広がりを児童へ期待したいのかを、教師側で明確にし、地域資源への関心についての般化を目指すことが課題である。</p>

高等部

実践	地域資源を活用した防災学習が知的障害を有する高等部生徒に及ぼす効果
学 習 活 動 の概要	<p>総合的な探究の時間 対象：高等部生徒11名</p> <p>6月27日：「オリエンテーション」</p> <p>6月30日：「調査（災害ボランティアについて）」</p> <p>7月5日：「災害について考えよう」</p> <p>（講師：青森県防災士会職員、弘前市社会福祉協議会職員）</p> <p>・弘前市社会福祉センター（弘前市社会福祉協議会）において実施</p> <p>災害時の避難行動や日々できる備え、災害ボランティアについての講義、災害ボランティアに関する体験活動（災害ボランティア登録用紙記入、災害ボランティアの指示系統で依頼を受けてのダンボールベッドや間仕切りの組み立て等）を実施</p> <p>7月7日：「お礼状作成」</p> <p>8月28日：「調査したことを整理してまとめよう」</p> <p>9月5日：「発表しよう」</p>
分析方法	・質問紙（リッカート法、自由記述）の統計分析、テキストマイニング
結果	<p>・地域人材との直接的なやり取りを通じた疑問解消や課題解決ができる学習活動の設定が、防災意識向上に有効であることが確認された。</p> <p>・地域資源への視点の広がり、多様な人々の存在の認識、自分ごととしての思考が確認された。</p> <p>・地域人材からの学びを日常の生活場面に落とし込む手続きの必要性が確認された。</p>

以下の表は、各実践での成果・課題・発展の項目を整理したものである。共通項として確認された内容を、下線：知見の広がりや深まり・地域資源への気付き・自分ごと、**太字**：意欲、動機づけ、二重下線：般化としている。

V まとめ

1 成果

学部	小学部	高等部
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>児童の知見の広がりや深まり</u> ・自ら外部講師や自然と関わろうとする ・積極的かつ意欲的な姿 ・児童が地域の方々のために自ら関わろうとする姿 ・地域人材活用の継続、拡大が効果的 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業後の防災意識の向上 →能動的関与が大きければより向上 ・<u>地域資源への視点の広がり</u> ・多様な人々の存在の認識 ・講義や体験活動を通して自分にできることは何かを考えることができた。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・学習に取り組む前段階における指導の工夫や学習時における手立てや支援方法などを考慮 ・生徒の実態に即した学習内容、支援 ・<u>日常への広がりにつなげるための教師の役割</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の実態に即した学習内容、支援、動機づけ ・<u>学習内容の日常化への手続き</u>
発展	<ul style="list-style-type: none"> ・地域資源との関わりを通した社会への興味関心の拡大 ・地域人材との継続した関わり、つながりの拡大 	<ul style="list-style-type: none"> ・より探究性のある学習活動の設定 ・地域人材からの学びを日常の生活場面に落とし込む学習活動の設定

地域資源を活用した体験型の学習活動が、学習効果の高まりにつながり、小学部と高等部に共通して知見の広がりが確認された。小学部では、児童が親や親族、教師、デイサービスの職員以外に教えてくれる人の存在を知ることができた。また、地域人材を学校に招いて自分たちがもてなす学習形態では、能動的に地域人材に関わろうとする児童の姿が確認された。高等部では、トップダウンの環境設定による受動的な姿勢から、講義を聞きながらメモを取ったり、質問をしたりするなど、能動的に地域人材と関わりがあり、学習意欲の向上が見られた。また、地域のために自分にできることは何かと、自分ごととして思考することができていた。共通して、自分にも教えてあげられる、人に何かを与えられる力があると児童生徒が気付きを得る機会となった。

2 課題

児童生徒の実態に応じ、学習意欲を引き出しつつ学習のねらいに落とし込む教師の調整能力の必要性が確認された。地域資源を活用した学習により、児童生徒の学習意欲は高まる一方で、授業のねらいとは異なる方向への学びの広がりも想定された。また、地域資源を活用した学習からの学びを日常生活に般化するための学習活動の設定や支援の必要性が確認された。児童生徒の学習意欲を高め、維持しながら、イベントとして終わらせずに教師が学習活動をコーディネートしていく力が求められる。

3 発展

(1) 児童生徒の自主性・探究性を高める要素

動機づけに着目することで、児童生徒がより意欲的に地域資源からの学びを得られるのではないかと考える。動機づけの理論として、「自己決定理論 (Self-determination Theory)」がある。ロチェスター大学 (アメリカ) の Deci, E. L. と Ryan, R. M. によって提唱された人間の行動やパーソナリティに関する動機づけ理論のことであり (上淵, 大芦, 2019)、自己決定理論における内発的動機づけと外発的動機づけの連続性 (Deci&Ryan, 2000) を図 1 に示した。図 1 では動機づけの連続性を、行動 (他律的、非自己決定的)、動機づけ (非動機づけ、外発的動機づけ、内的動機づけ)、自己決定性の段階 (なし、外的調整、取り入れ的調整、同一化的調整、統合的調整、内発的調整)、知覚された因果の位置 (非自己的、外的、外的より、内的より、内的) で整理しており、児童生徒の表出の見取りにより、自己決定性の段階を確認することができる。

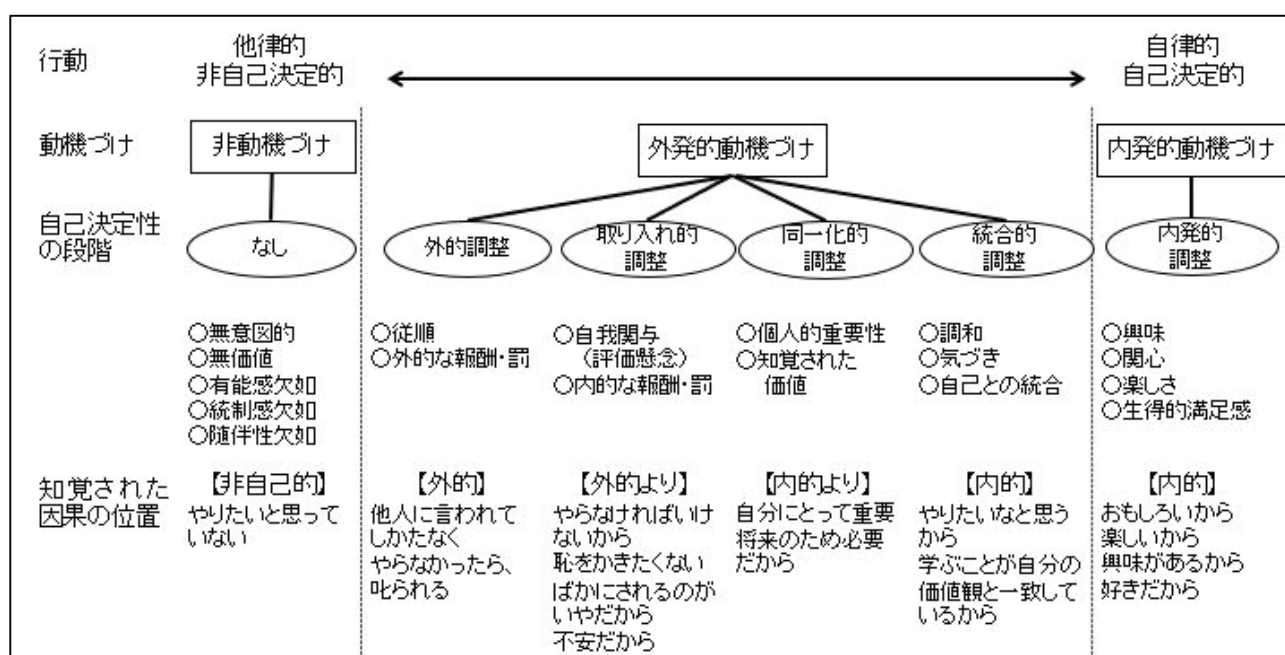


図 1 自己決定理論における内発的動機づけと外発的動機づけの連続性 (Ryan & Deci, 2000)

Ryan, R. M. & Deci, E. L. (2000) Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55, 68-78.

図 1 における動機づけ、自己決定性の段階をもとに、小学部児童と高等部生徒の記録や表出の様子を、地域資源を活用した学習前 (文字入力のみ) と地域資源を活用した学習中・学習後 (太字・灰色) として整理した。

小学部、高等部それぞれにおいて、地域人材を活用した学習中・後に自己決定性の段階に変化が見られていることから、児童生徒の動機づけの高まりが確認された。今後も地域資源を活用した実践を継続していくうえで、自己決定性の段階を手掛かりとし、児童生徒の動機づけを内的な状態に近づけ、維持していくような学習活動を構築することが、地域での学習において自主性・探究性を高める視点になると考えられる。

動機づけ		外発的動機づけ		
自己決定性の段階		外的調整	取入れの調整	同一化的調整 統合的調整
小学部			・教師に促されて植物を探そうとする。 ・講師の説明に興味を示すことが少ない。	・自分から色々な形や食べられる植物を探し始めた。 ・自分の虫かごに色々な植物を入れ始めた。
			・幼虫が入った自分の虫かごは受け取るが、それ以上の行動はない。	・友達と一緒にカブトムシを観察するようになった。 ・触ってみたいと話し、つんと触るようになった。 ・昆虫ゼリーをあげて世話をした。
			・教師の促しで来客者に声をかける。	・自分から畑のことや例年の七夕会についてなど、学校のことについて教えた。
高等部		・防災士や社会福祉協議会職員の講義を聞いていた。		・学んだことを自分の日常と照らし合わせて、自分にできることを考えた。
				・学校周辺で大雨が降った際、「早く帰らなければいけない?」「避難しなければいけない?」等、教師に相談したり、友達に話しかけたりする様子が見られた。
				・自発的に講師に質問した。
				・多様な人の存在への気付き、自分にできそうな災害ボランティアについて考えたりした。
				・防災意識が向上した。

図2 地域人材活用授業の学習前と学習中・後における自己決定性の段階の変化

(2) 地域社会と特別支援学校とのつながり

児童生徒の学習のフィールドとして地域資源を活用する以上、地域社会と特別支援学校のつながりは重要なものとなる。しかし、特別支援学校は地域の小中学校と異なり、多様な学区から児童生徒が通学することとなる。そのため、学校周辺の地域住民と顔を合わせたり、接触したりする機会は限定的であり、児童生徒や学校について理解を得るには学校側からのアクションが必要となる。

地域社会と特別支援学校のつながり作りのプロセスについて検討し、段階・内容・教師（個人）に求められること・学校（組織）に求められること、の項目で整理したものを図3に示した。

地域社会と特別支援学校のつながり作りのプロセス			
段階	内容	教師（個人）に求められること	学校（組織）に求められること
1	地域人材を発掘する	○教師の市民力 ・地域に入っていく、見る、知る。 ・児童生徒に求めることを教師が実践する。	○教師（個人）の取り組みの把握・共有
2	地域人材と教員がつながる	・地域住民とのつながりを構築する。 (転動があるからこそ、そのスキーム、手応えを掴んでおく)	
3	地域人材と児童生徒をつなげる	○児童生徒と地域人材をつなぐ、コーディネート能力 ・地域人材に伝える力 (学習のねらい、思いの共有→児童生徒理解の促進)	
4	地域社会と特別支援学校の関係構築	○児童生徒のチャンネルを増やす。 ・講師（地域人材）を固定化しない。	○地域人材とのつながりの継続 ・教師間でつながりを共有する仕組みを構築する。 (打ち合わせや授業を通し、複数人、グループで教師が地域人材と関わる機会を設定) ○相互理解の機会創出 ・地域に学校が見えるようにし、理解され、協力を得られるようにしていく。

図3 地域社会と特別支援学校のつながり作りのプロセス

取り組む内容を4段階で整理しており、段階1から段階3は教師（個人）が中心、段階4は学校（組織）が中心となって取り組んでいくものとなる。「地域人材を発掘する」「地域人材と教員がつながる」「地域人材と児童生徒をつなげる」プロセスでは、地域社会を知り、住民とつながる教師の市民力が求められると考えられた。教師の一市民としての側面を感じることで、児童生徒の視点が社会に向かっていくことも期待される。また、授業の打ち合わせを通して学習のねらいや教師の思いの共有をすることで、地域人材と教師の関係性構築に加え、地域人材の意識が児童生徒の理解に向かうことにつながると考えられた。そのため、児童生徒と地域人材の相互理解を深めながら学習を展開していく教師のコーディネート能力が求められる。

教員が構築した地域人材との関係性により、これまで関わりのなかった地域人材の紹介を受け、新たなつながりを構築して学習活動への協力を得ることが期待される。小学部の実践では、昨年度から講師をしていた地域人材から、新たな地域人材を紹介してもらい、授業への協力を得ることができた。また、来年も七夕用の笹をいただく約束をしたり、小学部でつながりをもった地域人材と高等部生徒が他の学習活動で関わりをもったりするなどの発展がみられたことから、構築した関係性が児童生徒の学習活動に広がりを与えることも確認されている。

「地域社会と特別支援学校の関係構築」では、学校（組織）として、地域人材とのつながりを継続する取組が必要となる。教員一人の取組とせず、複数人で打ち合わせや授業を行うことで地域人材と教師のつながりを広げ、転勤等でのつながりの消失を防止する。また、学校内に地域住民を招く等、地域に学校が認識される取組を通し、特別支援学校や児童生徒に対する地域住民の理解を得ることで、学習活動への協力を得られるようにすることが求められる。また、児童生徒のチャンネルを増やすために講師（地域人材）を固定化しない意識も必要となる。

（3）学部を接続してとらえることによりみえる、将来のライフキャリア充実に向けた地域実践の意義
本校高等部では、虫を苦手とし、屋外での学習活動参加時に虫への恐怖感から集中できなかったり、作業学習の内容の調整が必要となったり、現場実習先の選定に影響が出たりしている生徒が在籍している。個人の好悪の問題ではあるが、虫と触れ合う機会が少なかったことで、恐怖感や嫌悪感が増幅し、逃避する対象となったことも考えられる。また、外出意欲が低く、休日は自分から外出はせずに自宅で過ごす生徒もいる。

本研究において、小学部では、地域資源を活用した実践を通し、学習効果の一部として自然への興味関心の拡大が確認された。後述する内容はあくまでも一例として、自然学習の内容にフォーカスする視点となるが、小学部の実践と、高等部生徒の実態を接続してとらえることで、小学部低学年段階からの地域資源を活用して得られた学びが、将来のライフキャリア（社会参加、余暇、就労等）の充実につながる一つの指針となるのではないかと考えられた（図4）。また、各学部での取組を接続してとらえることで、地域実践の意義が確認できるのではないかと、児童生徒の将来の可能性を拡大できるのではないかとということも考えられた。

地域を発見探究グループでは、小学部低学年と高等部での実践を行ったことで、特別支援学校の入り口と出口を接続してとらえる機会となった。また、実践者同士の情報共有により、各実践の意義を再確認、創出する機会となった。

児童生徒は高等部を卒業後、それぞれの地域で社会参加をする。自然学習や防災学習に留まらず、将来のライフキャリアの充実を見据え、学部や発達段階を接続してとらえながら地域での実践の意義を見出し、児童生徒一人一人が地域において、自ら人とつながり、支え合いながら充実した社会生活を送れ

るように今後の実践を発展させていきたい。

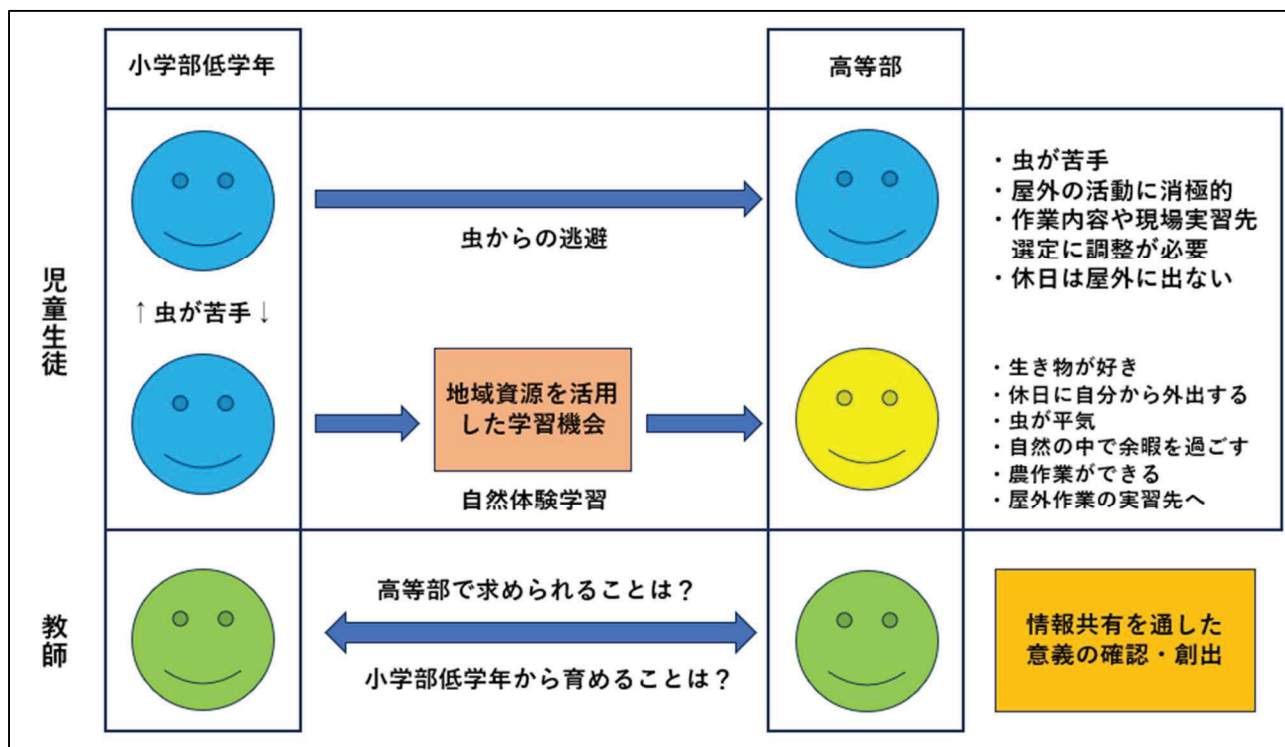


図4 将来のライフキャリア充実に向けた地域実践の意義

【引用・参考文献】

- ・上淵 寿・大芦 治編著（2019）：新・動機づけ研究の最前線. 北大路書房
- ・Ryan, RM & Deci, EL (2000) : Self-determination theory and the facilitation of instrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55, 68-78